

# 日英語のデフォルト志向性とその解除 —英語の非定形節に見られる主体化現象を中心に—

廣瀬幸生 (筑波大学)

## 1 本発表の目的

日英語に関する認知言語学的研究では、日本語は英語に比べて主体化の度合いが強い、つまり、主体が状況に自己を投入する度合いの強い言語であるということが明らかにされてきたが、これは、日本語を英語の定形節と比べた際の特徴である。英語でも、非定形節を観察すると、日本語と同じような主体化現象が見られる。本発表では、まずこの事実を観察し、その後、日本語との比較から見た英語の定形節と非定形節の主体化に関する違いを説明する理論的枠組みとして「言語使用の三層モデル」(Hirose 2015 など)に触れ、三層モデルにおける日英語の「デフォルト志向性とその解除」(Konno 2015 など)という観点から議論を行い、この現象をより広い視野から捉える。

## 2 日英語における主体化：定形節と非定形節の場合

### 2.1 主体化による状況の主観的把握

- (1) a. 向こうにバスが見える。 [主観的把握]  
b. I (can) see a bus over there. [客観的把握]  
c. わたし(に)は、向こうにバスが見える。 [対比読み] (西村 2000)
- (2) a. ほら、歩いている (でしょ)。歩いている (でしょ)。  
b. ほら、彼が歩いている (でしょ)。歩いている (でしょ)。  
c. ほら、私が歩いている (でしょ)。歩いている (でしょ)。 [観察者読み] (森 1998)
- (3) Look, I'm walking. [(2a)と(2c)の両方に対応 (cf. Look, he's walking.)]

### 2.2 英語の非定形節における主体化 (自己の状況への投入)

#### 2.2.1 心的作用を表す動詞 (心的動詞) の非定形節補部

- (4) a. I want to win.  
b. I want him to win.  
c. (?)I want me [or myself] to win. [対比読み] (cf. Horn 1984)  
(Cf. I want you to win more than I want {me / myself} to win.)
- (5) a. I would much prefer going to the movie.  
b. I would much prefer his going to the movie.  
c. (?)I would much prefer my going to the movie. [対比読み]
- (6) a. I enjoyed playing the piano. [主体読み]  
b. I enjoyed my playing the piano. [観察者読み] (cf. Lakoff 1972)
- (7) a. I imagined playing the piano.  
b. I imagined myself playing the piano. (cf. Vendler 1982)
- (8) a. I remember switching off the light.  
b. I remember myself switching off the light. (cf. Lyons 1982)

[注：対比読みも観察者読みも、「自己を他者と同列におく」点で共通。]

#### 2.2.2 懸垂分詞構文における主体化 (cf. 早瀬 2009)

- (9) a. Seeing a police officer, he ran away.  
b. Turning the corner, I bumped into something hard.
- (10) a. Looking out of the window, the mountains were beautiful. (江川 1991)  
b. Turning the corner, there was a man standing there.

- (11) a. 窓から外を見ると、山が美しかった。  
 b. 角を曲がると、男がそこに立っていた。

### 2.3 日英語の主体化現象に関して説明すべき問題

- ①定形節においては、日本語のほうが英語より主体化の度合いが強いのはどうしてか。  
 ②英語でも、非定形節になると、定形節に比べて、主体化の度合いが強くなるのはどうしてか。

## 3 「言語使用の三層モデル」の要点 (Hirose 2015, 廣瀬 2016, 廣瀬ほか 2017 など)

3.1 状況を捉え、それを言語化する話し手を、伝達の主体としての「公的自己」と、思考・意識の主体としての「私的自己」という二つの側面に解体する。英語は公的自己中心の言語、日本語は私的自己中心の言語と特徴づけられる。

3.2 言語使用は、「状況把握」(私的自己による思いの形成)、「状況報告」(公的自己による思いの伝達)、「対人関係」(公的自己による聞き手への配慮)という三つの層からなり、言語のもつ「自己中心性」が公的自己にあるか、私的自己にあるかによって、三つの層の組み合わせが異なる。

3.3 公的自己中心の英語では、通常、状況把握と状況報告が一体化し、それに対人関係の層が付加される(図1参照)。一方、私的自己中心の日本語では、通常、状況把握が状況報告および対人関係から独立している(図2参照)。

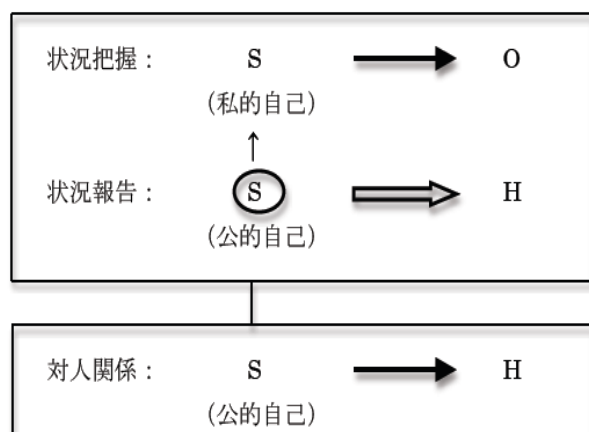


図1 公的自己中心の英語

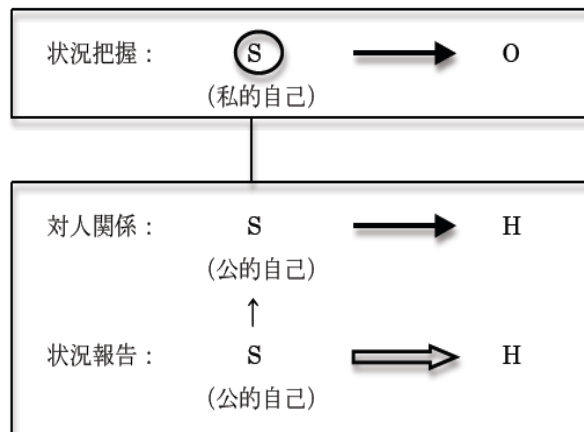


図2 私的自己中心の日本語

3.4 日本語では、私的自己の意識はその意識内で自己完結的に語ることができる。それに対し、英語では、私的自己の意識は当該意識の外側に公的自己を想定しない限り語ることはできない。

(12) (自分は)絶対に正しい(と {ぼく/きみ/彼} は思った。)

(13) a. \*Self be absolutely right. [意識内の self と時制は公的自己に依存]

b. {I was / You were / He was} absolutely right(, {I / you / he} thought).

[英語の定形節では、主述間の人称の一致と時制の標示は公的自己の視点で決定される。]

3.5 日英語における状況把握の主観性・客観性の違い：問題①に対する説明(廣瀬 2016 参照)

(14) 日本語では状況が主観的に把握されるのが普通なのは、日本語が思考・意識の主体としての私的自己中心の言語であり、状況把握が状況報告から独立しているため、聞き手への情報伝達に縛られないで、話し手は状況のなかに身をおき、状況内から状況を捉えることができるからである。

(15) 英語では状況が客観的に把握されるのが普通なのは、英語が伝達の主体としての公的自己中心の言語であり、状況把握が状況報告と一体化しているため、聞き手への情報伝達が重視され、話し手は聞き手と等位の立場から状況を観察する報告者の視点をとらなければならないからである。

## 4 デフォルト志向性の解除

4.1 デフォルト志向性：個別言語が無標の場合に示す意味・語用論的傾向（Konno 2015）。三層モデルでは、日英語のデフォルト志向性を図1と図2に示す三層の組み合わせで捉える。

4.2 デフォルト志向性が解除されると、日本語では、通常、分離している状況把握層と状況報告層（ならびに対人関係層）が一体化する現象が生じ、一方、英語では、通常一体化している状況把握層と状況報告層が分離し、その結果、公的自己による状況報告の制約を受けないで、私的自己による状況把握が際立つ（詳細は Konno (2015), 今野 (2017) など参照）。英語の非定形節もその一例であり、その観点から問題②に対する説明が可能となる。

4.3 心的動詞補部の非定形節（動名詞や分詞節の場合）：動詞の主語である心的主体、つまり私的自己による直接把握（直接経験（体験）や直接知覚など）を表す。非定形節補部の部分自体は、（話し手の）公的自己と結びつく人称の一致や時制標示は不要なので、（主語の）私的自己による状況把握だけが問題となるため（cf. Wada 2013）、主体化の度合いが強くなる。

- (16) a. I enjoyed playing the piano. (体験的楽しみ)  
b. I enjoyed my playing the piano. (知覚的楽しみ)  
(⇨ I enjoyed SEEING/HEARING myself playing the piano.) [自己が知覚の対象となり、客体化される。]
- (17) a. I imagined playing the piano. (体験的想像)  
b. I imagined myself playing the piano. (知覚的想像)  
(⇨ I imagined SEEING/HEARING myself playing the piano.)

4.4 心的動詞が to 不定詞節 をとる場合：to VP 形は「体験志向的」に解釈され、私的自己による主体化（状況への自己投入）の読みが与えられる。NP to VP 形（目的語繰り上げ構文）は「事態志向的」に解釈され、want や intend などでは、私的自己による事態実現の願望や意図が表され、believe や think などでは、私的自己による事態の認識判断が表される。

- (18) a. I want to win. (体験願望)  
b. I want him to win. (事態実現願望)  
c. I want me (or myself) to win. [自己が他者と同じ側に置かれる事態実現願望となり、自己の客体化が起こる。その結果、観察者のあるいは対比的読みが強くなる。]  
d. I really would like to see you win. I want you to win more than I want myself to win. [観察者読みの喚起＋対比読み]
- (19) a. I intended to go there. (体験志向)  
b. I intended {him / myself} to go there. (事態実現志向)
- (20) a. \*I believe to be shy. [認識動詞 believe は体験志向的解釈ができない。]  
b. I believe {him / myself} to be shy. [事態認識判断：判断対象は言語化される。自己が判断対象になると、他者と同じ側におかれるので、自己の客体化が起こる。]

4.5 懸垂分詞構文：定形の従属節と異なり、非定形の分詞節は人称の一致や時制標示が不要となるため、公的自己の視点制約から自由になる。そうすると、私的自己による状況把握を前景化することが可能となり、それによって、構文全体が私的自己による直接把握（直接経験＋直接知覚・認識）を表すことも可能となり、主体化が起こる（cf. 早瀬 2009）。

- (21) a. Turning the corner, there was a man standing there.  
b. Turning the corner, {I/(S)HE} SAW (there was) a man standing there.  
(直接経験) (直接知覚・認識)  
[知覚・認識主体は私的自己なので、I とは限らない。]

- (22) a. Then he fetched some newspapers from the kitchen table, went into the study, and settled down in his favorite armchair, looking forward to a quiet and undisturbed evening. Reading the evening paper, a dog started barking.

(Kortmann 1991)

- b. Reading the evening paper, HE HEARD a dog start barking.

Cf. : 場所句倒置構文 : 英語の公的自己中心性を解除し、私的自己の直接知覚による状況把握を表すのに特化した主体化構文 (Shizawa 2015 参照)。

- (23) a. Mike pulled the album from the shelf, laid it on the desk, and opened the front cover. Inside was a picture of himself as a baby not yet two years old.

- b. HE SAW inside (was) a picture of himself as a baby not yet two years old.  
[himself は状況把握の主体である私的自己に照応している。]

- c. 懸垂分詞+場所句倒置構文 : (i) Opening the wrapping, inside was a little tin box.  
(ii) Upon opening the package, inside was a folded facial mask.

4.6 問題②に対する説明 : 英語の定形節は公的自己中心なので客観的把握を好むが、非定形節は主述間の人称・時制の制約から自由になることで、公的自己中心というデフォルト志向性が解除され、私的自己による状況把握が前景化されるので、主体化の度合いが強まる。

## 5 まとめ : 全体的要点

主体化現象の背後には、日英語間であれ、英語の定形・非定形節間であれ、三層モデルでいう私的自己中心か、公的自己中心かの自己中心性に関する違いが関わっている。

## 参考文献

江川泰一郎 (1991)『英文法解説—改訂三版』金子書房. / 早瀬尚子 (2009)「懸垂分詞構文を動機づける『内』の視点」『「内」と「外」の言語学』坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編), 55-97, 開拓社. / Hirose, Yukio (2015) “An Overview of the Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32, 120-138. / 廣瀬幸生 (2016)「主観性と言語使用の三層モデル」『ラネカーの(間)主観性とその展開』中村芳久・上原聡(編), 333-355, 開拓社. / 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子(編) (2017)『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』開拓社. / Horn, Laurence R. (1984) “Toward a Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-Based and R-Based Implicature,” *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications*, ed. by Deborah Schiffrin, 11-42, Georgetown University Press. / Konno, Hiroaki (2015) “The Grammatical Significance of Private Expression and Its Implications for the Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32, 139-155. / 今野弘章 (2017)「デフォルト志向性の解除」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子(編), 69-89, 開拓社. / Kortmann, Bernd (1991) *Free Adjuncts and Absolutes in English: Problems of Control and Interpretation*, Routledge. / Lakoff, George (1972) “Linguistics and Natural Logic,” *Semantics of Natural Language*, ed. by Donald Davidson and Gilbert Harman, 545-665, D. Reidel. / Lyons, John (1982) “Deixis and Subjectivity: *Loquor, ergo sum?*” *Speech Place and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, ed. by Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein, 101-24, John Wiley and Sons. / 森雄一 (1998)「『主体化』をめぐる」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会(編), 186-198, 汲古書院. / 西村義樹 (2000)「対照研究への認知言語学的アプローチ」『認知言語学の発展』坂原茂(編), 145-166, ひつじ書房. / Shizawa, Takashi (2015) “The Rhetorical Effect of Locative Inversion Constructions from the Perspective of the Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32, 156-176. / Vendler, Zeno (1982) “Speaking of Imagination,” *Language, Mind, and Brain*, ed. by Thomas W. Simon and Robert J. Scholes, 35-43, Lawrence Erlbaum. / Wada, Naoaki (2013) “A Unified Model of Tense and Modality and the Three-Tier Model of Language Use,” *Tsukuba English Studies* 32, 29-70.